

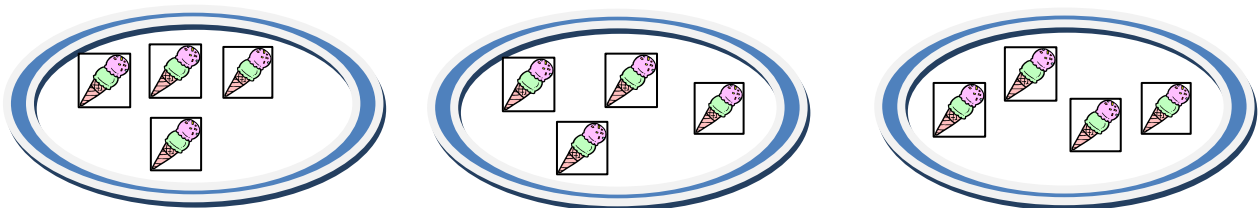
主に指導する教科・領域 算 数

実 態	目 標	
2位数までの足し算の筆算ができる。ひき算は苦手である。九九の暗唱はでき、身近な生活場面で九九を利用した計算もできる。簡単な割り算も支援があればできる。学習への取組はよいが、ちょっとした間違いがあると自信をなくし、涙ぐんだりうずくまったりすることがある。	長 期	2位数以上の除法を、筆算を用いて計算することができる。
	短 期	具体物を決められた数に均等に分けることができる。
	手 だ て ・机上での操作がしやすいように、分配する絵カードは4cm四方にする。 ・数式への導入を図るため、絵カードの総数、分配する数、分配する一つ当たりの枚数を記入するワークシートを用意する。 ・分けることが正確にできるように繰り返し課題に取り組む場を設定する。	

< 実 践 事 例 > 単元「分けてみよう」(児童F)

<分けてみよう>

- ① 初めに、Fの九九の理解について確認した。7の段に多少誤答があったが、おおむね九九を理解できているようであった。
- ② Fに“アイスクリーム”の絵カードを12枚手渡し、目の前に“お皿”の絵カードを3枚置いた。教師はFに、「アイスクリームのカードをお皿カードに、同じ数ずつ分けてみよう」と伝え、Fの様子を見た。Fは、1枚ずつ左からお皿カードに絵カードを並べていった。そして、Fが「できた」と言った後、教師は「1枚のお皿には、幾つのアイスクリームカードがありますか」と聞いた。Fは、「4枚」と答えた。特に手本として例題を示す必要はなかった。



<お皿カードとアイスクリームカード>

- ③ このような課題を一問一答で進めていった。課題は、以下のようなやりとりで進めた。

教師 「(複数枚のアイスクリームカードをFの前に置いて) 全部で幾つ？」

F 「(アイスクリームカードを数えて) ○○枚」

教師 「(複数枚のお皿カードをFの前に並べて置いて) お皿は何枚？」

F 「□□枚 (ワークシートにその数を書き込む)」

教師 「(二つの数が正しいことを確かめてから) お皿に同じ数ずつ分けてみよう」

Fは、支援者の指示や問いに従ってアイスクリームカードをお皿カードに分けていった。

- ④ Fは、初め、お皿カードに順に1枚ずつアイスクリームカードを置いていった。アイスクリームカードが増えてくると、Fは2枚ずつアイスクリームカードを置くようになった。提示するアイスクリームカードは、九九で扱える数にしてあるため、余りのない分け方になる。

Fには、「割る」という言葉も「÷」の記号も式も一切伝えずに、「分ける」という言葉で伝えた。ワークシートにも割り算の記号は記入していないが、いずれ書くことが可能なように枠を配置している。

<ワークシートの様式>

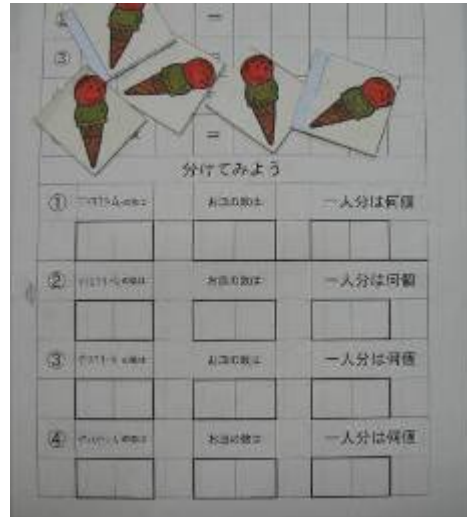
アイスクリームの数は お皿の数は 一人分は何個

--	--	--	--	--

<ワークシートの記入例>

アイスクリームの数は お皿の数は 一人分は何個

12		3		4
----	--	---	--	---



<実際に絵カードとワークシート>

- ⑤ Fは、こうした課題に繰り返し取り組んだ。Fが課題に慣れてきて、おおむね独力で課題を進めることができるようになってからは、教師は、課題ごとにまとめておいたアイスクリームカード群と、お皿カード群をセットにし、このセットを幾つかFの前に置いた。Fは、1セットずつ手順に従って分けていった。こうしてFは、九九の範囲内の余りのない分配を正しく行うことができるようになった。

評価	今後の課題
カードを均等に分配するという操作は、Fにとって難しいことではなかった。初めは1枚ずつ分けていた操作が、慣れてくるにしたがって、2枚ずつの分配に変わってきたことは、「分ける」ことへの見通しがもてるようになったと考えられる。また、均等に分けられないときには、どこかで間違えたのではないかと、自分の操作を見直す様子も見られた。ただ、今回の課題では、ワークシートに書き込んだ数から、九九の利用に気付くことはなかった。	「分ける」ということについては、十分見通しがもて、自信もついたのであったため、今後は、余りが出してしまう場合の課題に取り組み、割り算の数式へ進みたい。ただ、その際、数式の解答の手順が身に付くにつれ、「分ける」操作と別の取組と感じてしまわないように注意していきたい。